

第4章 小原遺跡出土の墨書土器について

大東文化大学教授
宮瀧 交二

SI05－14（第24図14）の墨書について

1文字目は「向」、2文字目は左側が「王」偏（「王」偏は、本来は「玉」偏）であることが明確である。その右側の旁（つくり）は不明瞭であり「見」のようにも見える（その場合には「現」となる）が、最終画を大きく右に払うところから「朱」と判断した。従って2文字目は「珠」であると考え、本墨書は「向珠」と読んでおきたい。

この「向珠」の意味するところは容易には判然としないが、「珠」は「玉」に通じるものであり、今日、「向珠（玉）」といえば、曹洞宗の僧侶・門徒が用いる数珠を構成する諸珠（玉）〔主珠（玉）108珠（玉）、親珠（玉）2珠（玉）、四天珠（玉）4珠（玉）〕のうち、房（ふさ）が付く親珠（玉）に対して、その反対側に位置する房の付かない親珠（玉）が「向珠（玉）」と呼ばれていることに注目しておきたい（註1）。言うまでもなく曹洞宗は道元が鎌倉時代に中国から将来したものであり、当該墨書土器に見える「向珠」の語が、後の曹洞宗の数珠の部分名称に連なるものであると安易に結論付けることは出来ない。

しかしながら、既に指摘されているように、関東地方の奈良・平安時代集落遺跡から出土する墨書土器は、郡家や国衙といった古代の地方官衙から多く出土する官職・施設名等を記した墨書土器とは異なり、人々の信仰や呪（まじな）い等に関与するものが多く、明らかに仏教との関わりで記されたものも少なくない。千葉県や茨城県の古代集落遺跡からは「弘貫」や「案豊」といった古代村落を遊行する僧侶名を記したとみられる墨書土器も出土しており（註2）、本墨書土器もまた、曹洞宗の数珠の部分名称と直接に結び付けることは出来ないが、「珠（数珠）に向かう」すなわち仏教信仰に向き合うという意味を持つ語であるとみておくことは可能であろう。更に大胆に述べるならば、前掲の「弘貫」や「案豊」と同様、「向珠」もまた僧侶名である可能性も指摘しておきたい。

SI05－1（第24図1）の墨書について

1文字目を「真」とすることに異論はないであろう。2文字目は「人（ひとやね）」の下に「巾」を記しているようであり、『五體字類』を見ると「布」の書例にこれと同様のものがあるようである（註3）。本墨書は「真布」と読んでおきたい。

この「真布」の意味するところも容易には判然としないが、「まほ」または「ましき」と読んだ場合には人名である可能性が浮上する。新元号「令和」が、『万葉集』卷五の「梅花の歌三十二首」の序文中の一節「初春の令月にして、氣淑く風和ぎ」から採られたことは記憶に新しいが、この32首のうち18番目の歌の作者として登場しているのが「神司荒氏稻布（いなし）」である。「荒氏」は「荒木氏」または「荒田氏」の略称とみられて

いるが（註4），ここで「稻布」が「神司」すなわち大宰府に出仕する神官であった点は重要である。「○布」という名は，神事に携わる人物に多い名であった可能性が高く（織物としての布は神に奉る神饌の代表的な品である），本墨書き土器に見える「真布」もまた，そのような人物であった可能性が高いのではないだろうか。関東地方の奈良・平安時代集落遺跡から出土する墨書き土器には，人々の信仰や呪（まじな）い等に関与するものが多いことは先に述べたが，「真布」もまた，この範疇で理解することが出来よう。今後の事例の増加を俟ちたいところである。



第40図 墨書き土器

註

1. 「曹洞宗お数珠の選び方と持ち方と豆知識 数珠 京念珠 専門店 はな花」<https://www.rakuten.ne.jp/gold/nenju-hana/mamechishiki/soutou/> (2020.03.29 確認)
 2. 宮瀧交二「コラム 村を廻る僧」(上原真人ほか編『列島の古代史 ひと・もの・こと 3 社会集団と政治組織』) 岩波書店
2005年
 3. 高田竹山『五體字類』西東書房 1916年
 4. 高木市之助・他校注『日本古典文学大系 5 万葉集二』岩波書店 1959年。